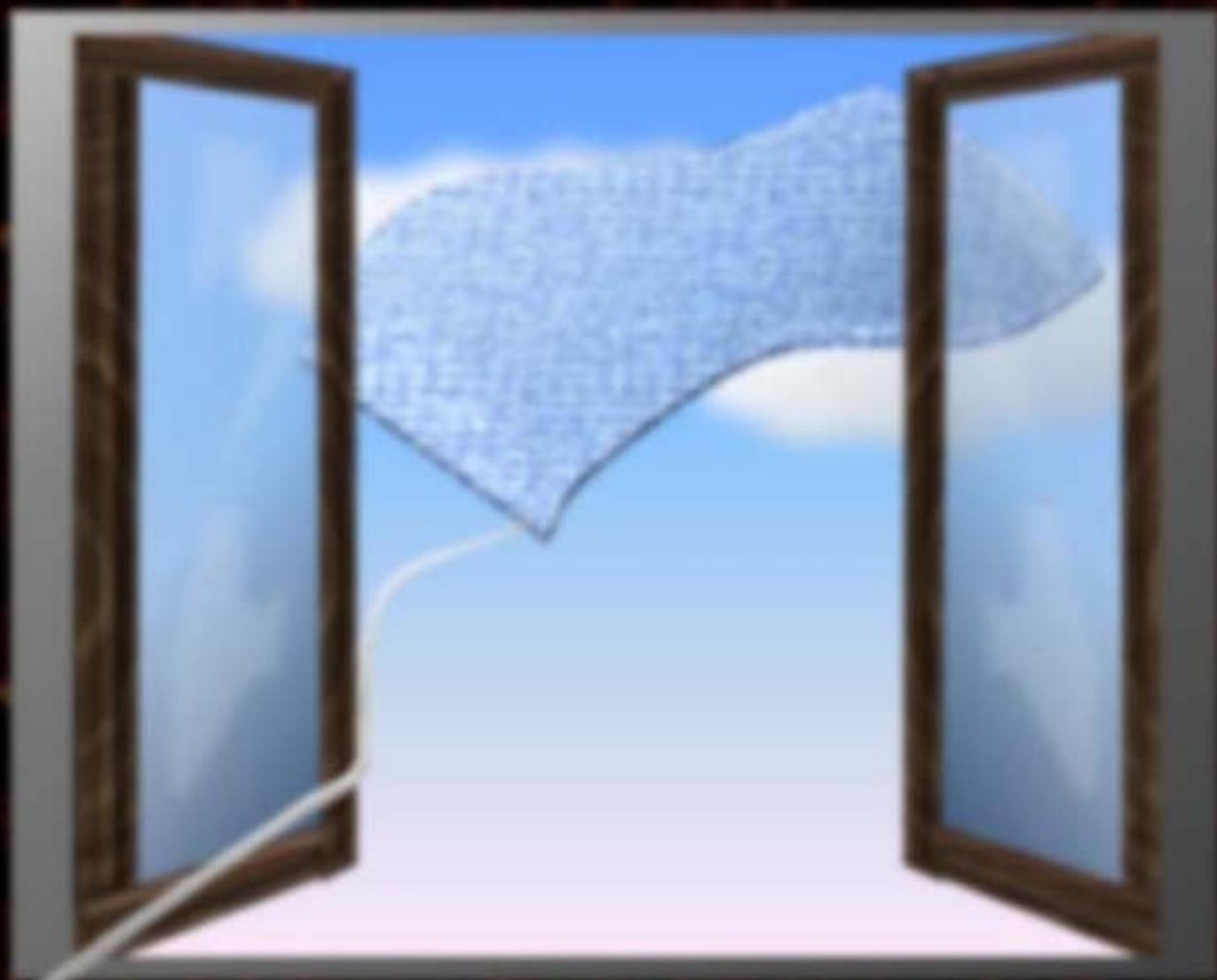


週刊

# 夢の窓

No.6



むうにい

## 銃器類始めました

---

「ちょっと、コンビニ寄っていかねえ？」友人の桑田が言った。

「うん、いいな。小腹が空いてたんだ」とわたし。

店の入り口には新しいのぼりが立てかけられていた。「銃器類始めました」と書いてある。

「ねえ、桑田。銃器類を始めたってさ」

「おうっ。見ていくか。よさげなのがあれば、1丁、買ってでもいいかもなっ」

昨日まで弁当を並べてあった棚に、様々な銃が陳列されていた。どれもパックに入っていて、値札とともに使用期限の印刷されたラベルが貼られている。

「これなんかどう？」わたしは、「ワサビーP38」という拳銃を手にとってみた。「人に向けて撃たないでください」と小さく注意書きがある。

「どれ……」桑田は「ワサビーP38」に顔を近づけ、ふむふむと吟味しだした。「安曇野に大王わさび農園つつうのがあってな、そこのわさび井がうまいんだ」

「はあ？」それとこれと、いったいどんな関係があるのだろう。

「おれとしちゃあ、こっちの方がお勧めだがな」桑田が指差したのは「デザートベグル」だった。見るからにずっしりとした作りである。

「カリカリに乾いたパンみたいだね」わたしがそう言うと、ちょっと小ばかにするように、鼻を鳴らした。

「こいつの威力はたいしたもんなんだぞ。ガス圧作動で、100メートル先までクリーム・チーズを飛ばすことができるんだ」

「す、すごいな……」確かにそれは驚くべき性能だった。

他にも、「激辛マヨネーズ22口径」という、たいそうコンパクトな銃がある。あんまり小さいので、まるでオモチャにしか見えない。

「これは護身用にもならないよね」わたしは「激辛マヨネーズ22口径」を、パックに入ったまま、桑田に向けて撃つ真似をしてみせた。

「ば、ばかっ、やめろっ！」顔をかばうように両手をこちらに向け、大げさなほど怯える。「それは、最強の拳銃なんだぞっ！」

わたしはまじまじと「激辛マヨネーズ22口径」を見つめた。こんなちゃちな物が？ 税込みで498円だった。

「モンハナシャコっているだろ？ あいつのシャコパンチに匹敵する破壊力なんだぜ」

「えっ、そうなの？」わたしは怖くなって、「激辛マヨネーズ22口径」を棚に戻した。「でもさ、この銃には弾を込めるところが見当たらないんだけど」

「弾？ なんのことだ。これはそんなもん必要ないぞ」妙なことを言う奴だ、桑田の顔は明らかにそう語っていた。

「だって、シャコパンチ並の弾が飛び出るんでしょ？ だから危ないんじゃないの」

「いやいやいや。使うのはマヨネーズだ。アクション映画とか、ほんとに見ないのな、お前って。ほれ、あっちの棚で売られてるだろ、キューピーの。あれをマガジンに装填して撃つんだ」  
わたしは口をぽかんと開けた。マヨネーズがそんなに危険な物だったとは。

わたしが信じていないとでも思ったのか、桑田は「じゃあ、見せてやるよ」と言って、「激辛マヨネーズ22口径」をレジに持っていった。もちろん、キューピー・マヨネーズも忘れずに。

さっそく、近所の空き地で試し撃ちをしてみることに。

桑田は真空パックから銃を取り出し、マヨネーズの容器をマガジンに取り付けた。わたしにはそれが、エアースプレーガンとタンクのように思えてならなかった。

「いいか、見てろよ」そう言うと、桑田は土管の上に置かれたコーラの空き缶に向かって、狙いを定める。

タンッ！ と乾いた音がして、銃口からマヨネーズがビュッと飛び出した。空き缶はたちまちマヨネーズだらけになる。

「あれだけ？ ねえ、あれでおしまいなの？ マヨネーズが勢いよく発射されただけじゃん」わたしは拍子抜けしてしまった。

けれど桑田は落ち着いたものである。

「缶をよく見ろ」

わたしは缶のところまで行って、べつとりと付いたマヨネーズをティッシュで拭う。元はコーラだったのが、「マヨネーズ飲料」に変わっていた。

「なんて怖ろしい。もしもこの銃が悪意のあるマヨラーの手に渡りでもしたら……」

思わず、ぶるっと身震いが走る。

## 久しぶりに江ノ島を訪れる

---

久しぶりに江ノ島へとやって来た。何年ぶりだろう。

江ノ島弁天橋は改築され、「動く歩道」になっていた。欄干に手を添えたまま、ツーっと滑るように橋を移動していく。

「便利になったもんだ。そのうち江ノ電も、島内に乗り入れをするようになるんだらうなあ」江ノ電が島を1周する様子が目に浮かぶ。

海産市場にある食事処へと入った。名物の「生しらす丼」を食べようと思う。

「生しらす丼を1つ」わたしが頼むと、店のおじさんはちょっと意外そうな顔をする。

「生しらす丼ですか？ 今どき珍しいですねえ」

わたしは不思議に思い、

「江ノ島と言えば生しらすじゃないですか。それとも、今は時期じゃなかったですか？」と聞く。

「いえいえ。もちろん、しらすはたと獲れますよ。それこそ、腐るほどにね。ですが、この島じゃ、しらすなんぞはもう古いんですよ」

「というと、何か別のものが流行ってるんですね？」わたしは察しよく尋ねた。

「ええ、よくわかりで。今1番人気は、何と言っても『フナムシ丼』ですね。どの店でも、品書きの最初に載せてますよ」

フナムシと言えば、磯をわが物顔に這い回る、あのゲジゲジのような生き物だ。「海のゴキブリ」などという異名を持っている。

「じゃあ、それにしようかな」驚いたことに、わたしはそれを注文していた。

「はい、じゃ、ちょっと浜まで下りて、何匹か調達してきますからねっ」おじさんはそう言うと、バケツと網を持って店を出ていった。

ほどなくして、バケツいっぱいフナムシを捕まえて戻ってきた。

「さっそく茹でますから。あー、ゆで加減はどうします？ じっくり煮るか、それともバリカタでいくか……」

ちょっと考えて、わたしは答えた。

「アルデンテで」

やがてお盆が運ばれてきた。丼の上で、山盛りのフナムシが、ほかほかと湯気を昇らせている。ぱっと見、石の下などでよく見かける、ワラジムシにそっくりだ。まったく抵抗がない、といえは嘘になる。

試しに1匹箸でつまんで、おそろおそろ口に入れてみた。

「あ、おいしい……」それがわたしの第一声だった。

「でしょ？ 見た目の奇抜さからは想像がつかない、なんてお客さんにいつも言われるんですよ」おじさんは誇らしげだ。

シャコとホタテを足して割ったような味と食感である。舌の上で、磯の香りがほのかに広がる。

食後の散歩に参道を登る。

展望台まで階段だけで行くつもりだったが、「エスカー」が「スーパー・エスカー」と変わっているのに気づき、久しぶりに利用してみることにする。

エスカーというのは実はエスカレーターのこと、子供の頃、親に連れられて、初めて乗ったとき、ひどくがっかりした覚えがあった。

名前からして、きっとすごい乗り物に違いない、そんな期待を胸にいざ乗車してみれば、ただのエスカレーターに過ぎないと知れば、それも当然のことである。しかも有料で、結構な値段を取られるのだった。

今回も、（壁の色を変えたとか、またお色直しなんだろうな）と思いつつ、赤いお社のような「エスカー乗り場」へと入る。

チケット売り場には、なぜか猫がたくさん集まっていた。それも普通のサイズではない。控え目に見積もっても、優に3倍はある。

「ははあ、食堂のおこぼれが、しらすからフナムシに変わったんで、栄養がついたんだな」そう推測した。おそらく、その仮説に間違いはないだろう。

エスカーはやっぱり、エスカレーターのままだった。「壁のお色直し」すらされておらず、鶯色のままである。

「ほらね……」ため息をついてステップに足を乗せた。

その途端、ぱっと景色が変わる。何が起きたのか、状況を把握するのに数秒ほどかかった。

周囲には海が広がり、遠く三浦半島まで見渡せた。

「どうなってるのっ?!」

ようやく、ここが展望台の中だということに気がついた。下からここまで、瞬時に運ばれてきたのだった。

「すごっ、ほんとにスーパー・エスカーだった！」

江ノ島の、ここ数年の様変わりには驚かされることばかりだ。

## まだ刀を携えている時代

---

いったい、いつの時代なのだろう。なまこ壁の続く、武家屋敷を思わせる川治いを、わたしはのんびりと歩いている。

道行く者は男も女もみんな、鎧兜に刀を下げていた。もっとも、鎧にせよ、刀にせよ、時代劇で見るとような代物とはちょっと違う。

例えば若者の鎧は、裏原宿系の、カラフルでポップなものばかり。

兜の前立ては、アルファベットで「LOVE」とか「JAPAN」といったオーソドックスなものだったり、ブランドのロゴをそのままあしらったものなど、様々だ。

胴にiPadを埋め込んでいる者も多く、twitterなどのソーシャル・サービスの文字が、リアル・タイムで流れている。

いつの時代か問う前に、そもそもどこの国かさえも怪しくなってきた。

わたしの鎧は、ポリ・カーボネートのベースに茶色のフェイク・レザーを貼り合わせたものだ。たいそう丈夫だけれど、思いのほか軽い。付けていることすら忘れてしまうほどだった。

一方、腰に帯びている鞘は、青いベルベットで包まれた、美しい装飾のものである。すらりと白刃を抜いてみると、フェンシングのフルーレよりちょっとだけ肉厚のロング・ソードだった。

目先までかかげ、じっくりと観察してみる。ぬらっとした刃文が見事だ。異形ではあるが、造りは日本古来のもののようだ。

そっと鞘に戻すと、わたしはまた歩き出す。なんだか、いっばしの剣士にでもなった気がした。

町外れまで来たとき、木の陰から5人の男達がばらばらっと現れ、行く手を塞いだ。グレーの鎧に、顔まですっぽりと覆う兜をかぶっている。ダース・ヴェイダーが新卒で入社したときのようだ、とわたしは心の中でつぶやいた。

「誰？」とわたし。すぐに、場面としてはふさわしくないセリフだと思い、「何やつだっ？」そう、急いで言い直す。

男達は抜き身をかざして、手短かに名乗った。

「我ら、辻斬りのアルバイトだ。お命、頂戴するっ！」

一斉に斬りかかってきた。けれど、わたしが鞘を払う方が一瞬、速い。

自分でもどんな立ち回りをしたのかわからないほど、事は素早く終わっていた。辻斬り達の間を稲妻のように走り抜け、ひゅっと雫を振り払い、再び剣を元の鞘に収める。

背後でバタバタと倒れる音がした。

「峰打ちだ」そう言っただけなのに、自分の剣ながら、（あれ？ 片刃の剣だったっけかな。両刃だったような気もするけど）などと記憶をたぐっているのだった。

地べたに這いつくばりながら、1人がつぶやく。

「くう……。『勇者の剣』かよ、ずっこいな……」

わたしはむっとして振り向くと、  
「悪いかよ。雑魚モンスターを倒しまくって、せっせと貯めたゴールドで手に入れたんだからなっ」と  
言い返してやった。

「い、いくらした？」

「えーと、たしか170万ゴールドだったかな」

「高っ……！」

値段に目を回したのか、それとも峰打ちが効いたのか、男はがくっと頭を落とした。

## 押し入れの中から世界をのぞく

---

目が醒めた。あんまり暗いので、まだ夜なのかなと思ったが、そうではない。  
ここは押し入れの中だった。

ふすまには指で穿ったような穴が開いていて、外からの光が漏れてくる。反対側の壁には、ピンホール・カメラの原理で、ぼんやりとした逆像が映し出されている。

最初に、右の目で穴をのぞいてみた。自分の部屋を想像していたけれど、そこに広がるのは荒涼とした平地である。そして、戦争が行われていた。

どこの国かはまったく、わからない。ただ、戦争の背景については、何となくだが理解している。  
ここは大陸の一部で、元は1つの国だったのが、とある事情により分断し、同じ民族同士で争っていた。

国境は深く険しい溝で分かたれており、鳥ですら行き来することがままならない。飛び交うものといえば、赤く熱せられた砲弾ばかりである。

胸に無数の針を突き立てられるような、ひどく悲しい光景だった。

わたしの右目は涙で溢れ、もはや何も見ることができなくなったので、今度は左の目でのぞいてみる。

緑の溢れる谷間だった。あちこちに集落が見える。牧歌的で平和な様子だ。

石畳の街路は人で賑わい、どの表情も明るい。肩を叩き合って笑う者、屋台の果物屋の前で、買ったばかりのリンゴを囓る者、熱心に議論をたたかわせながら散策する者。

この国には「不幸」という言葉が存在しない、そんな声がどこからか聞こえてくる。

わたしにはここが、地上の楽園と呼ぶにふさわしい場所だと思えた。降り注ぐ日の光までもが、黄金色の輝きを帯びて見える。

わたしの左目は、喜びのあまり涙ぐんでしまい、また物が見えなくなってきた。

ポケットからハンカチを取り出すと、両の目をぬぐう。

どちらが実際の世界なのだろうか？ 怖いけれど、知りたいという気持ちでいっぱいだった。

いくらかためらいもあったけれど、勇気を出してふすまに手をかける。

まぶしい光が押し入れの中の闇を追い払う。

緩やかな丘が、地平線の彼方まで続く。柔らかな日差しの下には、膨大な数の白い墓標が整然と並んでいた。

わたしは芝の上に足を下ろし、ひっそりと静まり返った名も無き墓標を見つめた。

全てが終わり、もはや何も変わることがない。

もう、涙が流れることはなかった。

## ポイントカードで魔法を使う

---

いつものコンビニで、ハンバーグ弁当とペット・ボトルのお茶を買う。

「ポイント・カードはお持ちでしょうか？」店員に尋ねられ、わたしは財布の中からカードを抜いて差し出した。

「あ、お客様のポイントは1000MP貯まっていますね。レベル8の魔法が使えますよ」

「えっ？」わたしは聞き返す。「魔法って何ですか」

店員は、おや、という顔をした。

「魔法というのは、科学を超えた力の事じゃありませんか。ポイント・カードにMPを貯めると使えるんですよ」

そうなんだ。知らなかった。

「使用方法とか書いたマニュアルってないですか？」とわたし。

「あります、あります。1冊、100円になります」

わたしは買うことにした。10ページくらいの、薄っぺらい冊子だった。

家に帰ると、弁当を食べることも忘れ、冊子をめくってみる。

「はじめに」と書かれた最初のページには、「注意！ 攻撃魔法は人に向けて使わないこと。範囲魔法は、十分に広い場所で発動させること。必ず大人がついて見ていること」とある。

内心、（どうせ、初心者がいきなり魔法など使えるはずがない）と考えていた。それに、せいぜい花火のようなものだろう、とも。

魔法にはレベルがあって、高位になるほど、消費するMPが増えていくらしい。

「レベル8」というのはその中でも最大級のもので、1回の詠唱で900MPも消費してしまう。

最後のページには、レベル8の魔法の一覧が載っていた。エセリアル空間から神獣を呼び出したり、四大元素の精霊を使役できるという。

リストのおしまいにあるのは「アース・クエイク」という呪文だった。たぶん、地震を引き起こす魔法なのだろう。

とはいえ、たかだかポイント・カードごときで、そんな大げさな技が使えるとは思えない。立て付けの悪い引き戸が、カタカタと音を立てれば上出来だ。

わたしは、カードをかかげ、「アース・クエイクっ！」と叫んだ。

とたんに、みしみしと部屋全体が揺れ初める。揺れは次第に大きくなり、立ち上がることすら困難になった。

揺れているのはこの部屋だけではない。窓の外では電線が縄跳びのようにしなり、屋根からは瓦が落ち、駐車しているクルマが次々とアラームを鳴らし出す。

そばにあったリモコンを引っつかんで、テレビを付けてみる。どの局でも緊急地震速報がフラッシュしていて、アナウンサーの緊迫した声が状況を繰り返し伝えていた。

画面に表示されている震源地は、わたしのいる、まさにこの場所である！

「そんな……まさか……」この成功がほかのことなら、小躍りをして喜んでいるところだが、今はただ、おろおろとするばかり。

揺れは1分ほど続いたと思う。次第に収まっていき、ようやく止んだ。わたしの心臓は、ばくばくと打ち続けている。

スマート・フォンからアニメの主題歌が流れ出す。着信だ。

「はい、もしもし……」

電話の向こうで、都知事が憤慨した声で言う。

「お宅、やってくれるじゃないか。『アース・クエイク』の魔法、唱えちゃったでしょ。首都圏全域がゆらゆらしちゃったんだからねっ。いい？ もう2度とだめだかんね、こんなことしちゃ」

あーあ、怒られちゃった。

ポイント・カードは、使いどころがほんとうに難しい。

## 相撲部屋の看板娘

---

その相撲部屋には看板娘が住んでいた。アドバルーンそっくりな体つきをしている。

住み込みの力士達もみんな、ボールのように真ん丸だ。両手両足が肉に埋まってしまっているため、独りでは移動することもままならない。

そんな彼らを、娘はほいっほいっとな転がしていく。部屋の中を行き来する時はもちろん、外に連れていくにも、そうやってコロコロ押していくのだった。

実は、この相撲部屋は経営状況が悪化していて、力士を食べさせていくのもやっとだった。

親方は、明日にでも部屋を閉め、旅館としてやっていきたいと考えている。そのことに娘は強く反対しており、口論が絶えなかった。

「部屋をやめてしまったら、あの子たちはどうなると思うの？ あんな真ん丸なんだもの、よその親方なんて、絶対に引き受けてくれっこないわ」

「だがなあ、このままでは黙っていてもこの部屋は潰れてしまう。そんなこと、お前だってわかっているだろう。弟子達には飯炊きや接客をやらしてもらえばいい。なあに、ちゃんこぐれえは作れるんだ。連中にとっても、悪い話じゃあるめえ」

「父さんはそれでも相撲取りなのっ？」娘は親方に突っ張りを操り出して責めた。

「何しやがるっ！」親方はとっさに上手投げで返す。

「あいたたっ！」もんどり打って倒れながら、娘はなおも言う。「あの子たち、みんな力士目指して頑張ってきたのよ。それなのに……」

親方はふいっと顔をそむけ、親指の背で目をぬぐった。

「わかってんだよ、んなこたあ。だからってよ、他にどうにもならねえじゃねえか」

娘も分別が戻ってきたのか、うつむいてしくしくと泣きだす。

「あたし達、どうしたらいいの？」

親方は娘の肩に手を置いたものの、言葉が見つからないらしく、黙ったままだった。

突然、物陰から途方もなく大きな肉団子が5つ、6つつ転がり現れた。よく見れば、力士達だ。どうやら、2人の話をさっきから聞き耳立ててうかがっていたようである。

「親方っ、お嬢っ！ おれら、旅館でも飯屋でも、なんだってやりますっ！ みんなで力を合わせりゃ、そのうちきつと、部屋を立て直せるって、そう信じてますからっ！」

「おめえら……」親方は絞り出すように言った。それから、たった今気がついたかのようにこちらをふり返り、「で、おめえさん、なんだい？ さっきからずっと見ていやがったな」

看板娘の方も、いくらかとげのある目を向け、

「そういえば、変な人がいるなあって思ったのよね。ここは関係者以外、立ち入り禁止のはずでしょ？ それとも、なんか用でもあるの？」

「えっ、いや。あの……」わたしはしどろもどろに答える。なぜここにいるのか、むしろわたしが聞きたいくらいだった。

「どすこい、どすこいっ！」力士達も声を合わせて非難する。

もう、何がなんだか。

「さ、さようならーっ」わたしはきびすを返して、すたこらと逃げ出した。

後日、相撲部屋があった場所を通りかかると、見世物小屋ができていた。表には、風船のような男達が転がったり、ぶつかり合ったりする歌舞伎絵が描かれ、勘亭流ででかでかと「毬相撲初場所」とあった。

けっこうな繁盛振りで、もぎりを務めるあの娘も大わらわである。

旅館はうまくいかなかったらしい。けれど、何が幸いするかわからない。彼らにとって、天職とも言える商売が見つかって、本当によかった。

どうしようかと迷った末、わたしはチケット売り場へと向かった。

## 和菓子をふるまわれる

---

貯金も使い果たし、ここ数日は水で飢えをしのいでいる。

「もう、だめかも。最期はせめて、人の迷惑にならないところで……」そんなことを思いながら、町を歩いていた。

和菓子屋の前を通りかかると、蒸し立ての餡この甘い匂いがしてくる。ぐう〜とお腹の虫が鳴り、思わず立ち止まってしまう。

ふらふらとショー・ウィンドウに寄って、中をのぞき込む。練り切り、大福、饅頭、どれもおいしそうだ。

空腹すぎて、胃がしんしんと痛んでくる。膝はかたかたと笑う。1歩も動きたくなかった。

店の奥に座っていたおばあさんがわたしに気づき、よっこいしょと立ち上がる。不審者だと思われたのだろう。無理もない。物欲しそうな様子で、店のガラス戸に手をつけているのだから。

わたしはいそいそと店を離れた。できるだけ早くその場を立ち去ろうとするのだが、自分の足ながら、まるで棒杭のように言うことを聞かない。

数軒ばかり行ったところで、背後から声が掛かる。和菓子屋のおばあさんだ。

「ちょっと、あなた。戻ってらっしゃいな」

わたしは気づかないふりをした。ちらっと、（警官を呼ばれ、交番にやっかいになれば、もしかしたら、何か食べ物もらえるかもしれない）とも考えた。

けれど、最後の一線で自身のプライドが許さないのだった。

「お待ちなさいったら」おばあさんは早足で追ってきた。草履の擦れる音はたちまち、わたしに追いついてしまう。

おばあさんはわたしの腕を力強く握った。「はあ……やっこさ、つかまえたっ」

わたしは観念し、

「すみませんでした、勝手にのぞきんだりして。あんまり、おいしそうだったから、つい」

「だったら、食べていきなさいよ。和菓子なんてものはね、見るだけのもんじゃないんだよ。腹に収めてこそのもんだ」

「あいにく、お金がないんです。今度、お金があるときには、きっと立ち寄らせてもらいますから」交番に突き出される心配はなさそうだ。わたしは一礼して、再び歩きだそうと向きを変える。

「おや、まあ！」おばあさんは呆れたような声をあげた。「あなた、うちの入り口の貼り紙を見落としただねっ？ もう1度戻って、よおく見るがいいよ。ほら、早くっ」

おばあさんに引っ張られながら、わたしは和菓子屋の前へと戻った。

なるほど、ガラス戸に大きく貼り紙がしてある。急いで書いたようなマジックの文字で。

〈本日、和菓子が無料で食べ放題！〉。

こんなに目立つのに、なぜさっきは気づかなかったのだろう。

「わたしが適当に見つろってあげるからね。さ、奥に上がって、ちゃぶ台の前に座ってなさい」

ちゃぶ台に次々と和菓子が運ばれてきた。久しぶりの食べ物を前に、わたしはなんだかくらくらとしてきた。

「いただきます」腹を満たしたいという無意識の行動か、真っ先に手を伸ばしたのはあんころ餅だった。

お茶とあんころ餅を交互に口へと運び、やっと心地がついたところで、今度はもなか、羊かん、らくがんと、食べ続ける。

満腹になると、さっきまで心の隅々にまではびこっていた悲壮感が、きれいさっぱり、消えていた。

「柏餅も食べていきなさい」おばあさんはそう言って、また皿を持ってきた。

その柏餅は、柏の葉っぱの代わりに、1万円札が包まれている。

わたしは驚いて、おばあさんの顔を見つめた。もしかしたら、わたしの祖母かと思ったのだ。

おばあさんは、そんなわたしの心中を察したらしく、静かに首を横に振る。

まるで、「わたしはあなたの祖母なんかじゃありませんよ。あなた方みんなのおばあさんなんだからねえ」

そう言っているような気がしてならなかった。

週刊 夢の窓 No.6

<http://p.booklog.jp/book/86407>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86407>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86407>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブックログ